大曾根章介　堀内秀晃
久保田　淳　三木紀人　編集
檜谷昭彦　山口明穂

漢詩・漢文・評論

第十一巻

明治書院

編　者

大曾根　章　介

久保田　　淳

檜　谷　昭　彦

堀　内　秀　晃

三　木　紀　人

山　口　明　穂

研究資料日本古典文学

第十一巻　漢詩・漢文・評論　定価 3,900 円

昭和 59 年 3 月 20 日　初版発行

東京都千代田区神田錦町 1-16

発行者　株式会社　明　治　書　院

代表者　三樹　彰

長野県長野市中御所 2-30

印刷者　大日本法令印刷株式会社

代表者　田中　忠

発行所　株式会社　明　治　書　院

〒101　東京都千代田区神田錦町1-16

電　話　東　京 (292) 3 7 4 1 (代)

振替口座　東　京　3—4 9 9 1

© S. Osone 1984

3391-26111-8305　製本　星共社

刊行の言葉

聖徳太子が摂政となり、十七条憲法の制定を初めとして種々の文化政策を打ち出した七世紀初頭から数えても、ほぼ十四世紀近くの歴史を有する日本文学の流れを一望の下に収めることは至難のわざである。しかも、多極化する国際社会にあって日本が文化国家としての役割を全うするに際して、まず自国の文化伝統への認識と省察を深めることは、今日における急務であろう。「汝自身を知れ」という言葉は常に真理である。自らの由って来たる文化・文学に対する無関心さが進行しつつある現代において、特にこのことを痛感せざるをえない。

このような問題意識のもと、蒼古の歴史を有する日本古典文学と技術社会の先端にあるわれわれ現代人との架橋ともなるべき、平易でしかも正確な古典文学解題書を目指して、ここに本書を編んだ。既刊の姉妹編としての「研究資料現代日本文学」にならい、ジャンル別の編成とし、主要古典文学作品並びに作家の詳細な解題とともに、主要作品については原文を豊富に引用し、注解をも加えることによって、文学事典類では期待しがたい、文学鑑賞講座的側面をも具備するように努めた。さらに直接それら古典に触れようとする人々のために、参考文献、翻刻、最近の研究動向など、最新の情報を提供しようと試みた。

編者達のおおけない望みは、実際の教育の場に立つ方々の教材研究資料として活用して頂くことによって、学生・生徒が日本古典文学の豊かな流れの具体的な姿に触れ、その一部をなりとも味わう機縁となること、そしてまた、国文学・国語学研究者にとっては、各領域における今後のより深められた研究のための、ささやかながらも確乎たる足場を提供することにある。その意図に比して達成は必ずしも十全であるとは言いがたいであろうが、読者諸氏の御理解を得て、本書が末長く活用されることを願ってやまない。

昭和五十八年三月

編者

凡　例

一、本巻は、『研究資料日本古典文学』の第十一巻、漢文学・評論・国学である。本巻では日本漢文学、評論文学及び国学の分野に属する作品・作家を対象とした。全体は、漢文学・評論文学・国学の各部から成る。

一、作品の配列は、ほぼそれぞれのジャンルにおける文学史的な年代に従うことを原則とした。評論文学の中では、さらに物語評論、歌論、連歌論、俳論、その他の芸術論に細分し、その中で年代順に配列した。

一、各作品についての解説は、〈概括〉〈成立および概観〉〈内容〉〈参考文献〉を柱とし、主要作品については、その〈本文〉を掲げ、通釈・語釈・解説を施した。それらの作品については、〈研究の動向〉をも加えた。

一、原典の引用はそれぞれ所拠の資料の表記に従い、必ずしも統一しなかった。

一、原則として、作品名は『　』で示した。また、雑誌・単行本名は『　』で示し、頻出する全集・叢書・文庫では『　』「　」の類を省き、当該集名を「　」で示した場合がある。

一、多様な作品に直接触れ、理解・鑑賞の一助に供するために、適宜コラムを設けた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

目　次

編者の言葉……一
凡　例……二
日本漢文学……一
懐風藻……七
勅撰三集……一三
空　海……一八
菅原道真……二二
慶滋保胤……二五
本朝文粋……二七
新猿楽記……三三
大江匡房……三四
遊仙窟……三七
白氏文集……三九
五山文学……五六
江戸時代の儒学……六九
藤原惺窩と林羅山……七一
石川丈山と深草元政……七三
中江藤樹……七五
山崎闇斎……七七
貝原益軒……七九
新井白石……八一
室　鳩巣……八三
伊藤仁斎……八五
荻生徂徠……八七
都鄙問答……八九
富永仲基……九一
服部南郭……九三
江村北海……九五
山本北山……九七
市河寛斎……九九
佐藤一斎……一〇一
菅茶山……一〇三
広瀬淡窓……一〇五
頼山陽……一〇七
斎藤拙堂……一〇九
梁川星巌……一一一
良　寛……一一三
狂　詩……一一五
先哲叢談……一一七
明治の漢詩文……一一九

評論文学……二一一
無名草子……二一三
上代の歌論……二二〇
平安時代の歌論……二二三
新撰髄脳……二二七
能因歌枕……二二九
俊頼髄脳……二四一
袋草紙……二四九
中世の歌学と歌論……二五三
古来風躰抄……二五八
和歌色葉……二六二
無名抄……二六四
近代秀歌……二七三
詠歌大概……二七七
毎月抄……二七九
後鳥羽院御口伝……二八六
八雲御抄……二八八
詠歌一体……二九〇
為兼卿和歌抄……二九二
悦目抄……二九四
愚秘抄……二九六
井蛙抄……二九八
正徹物語……二九九
近世の歌論……二〇六
耳底記……二一〇
戴恩記……二一二
梨本集……二一六
国歌八論……二一八
賀茂真淵の歌論……二二〇
本居宣長の歌論……二二三
小沢蘆庵の歌論……二二六
香川景樹の歌論……二二八
富士谷御杖の歌論……二二九
大隈言道の歌論……二三一
連歌論……二三三
二条良基の連歌論……二三七
ささめごと……二三九
ひとりごと……二四二
老のくりごと……二四四
筆のすさび……二四六
宗祇の連歌論……二四七
老のすさみ……二四九
至宝抄……二五一
俳論……二五三
貞門の俳論……二五六
談林の俳論……二六〇
芭蕉の俳論……二六四
俳諧問答……二六九
三冊子……二七四
去来抄……二八一

鬼貫の俳論……二九一
蕪村の俳論……二九四
南方録……二九八
国　学……三〇〇
北村季吟……三一一
契　沖……三一三
賀茂真淵……三一六
本居宣長……三一八
平田篤胤……三二八
伴信友と狩谷棭斎……三三二
文人、江戸派歌人の学問……三三五

芸術論ところどころ—

空海と筆…二〇　藤原明衡の省試不祥事件…三三　長恨歌の絵巻…三五　山崎闇斎と伊藤仁斎…七八　専応口伝（花道書）…一三八　成通卿口伝日記（蹴鞠書）…一五二　教訓抄（楽書）…一五七　作庭記（造園書）…一七二　入木抄（書道書）…一七二　珠光心の文（茶道書）…二三六　五輪書（兵法書）…二五五　等伯画説（画論）…二九六—　九鬼周造の『歌経標式』研究、『歌経標式』讃…一三三　野守の鏡…一四八　略本『定家十体』の幽玄様…一七六　藤原家隆の歌論…一七八　古人による紫式部讃・源氏物語讃…二〇五　貝原益軒と遊女小紫…二一五　名歌を知るということ…二三八　心敬のことば…二四一　乱世の詩人・芸能者達…二四三　連歌の付合…二五〇　竹田の春星（蕪村）評…二七三　「新島守」という言葉…二九〇　将軍と大名の俳諧…二九三　国学の四大人…三一〇　宣長の学問…三二七　平田篤胤と泉鏡花…三三一

日本漢文学

〈概括〉　日本人の創作した漢詩および文学的な漢文。

〈内容〉　漢文学は日本人が中国の言語文字を用いて、日本人の思想感情を表現したものであることはいうまでもないが、日本人は中国の文学が我国に伝わって来てから、長い間に亘ってそれを先進の文学として崇拝し、摂取咀嚼して自国の文学の発展に努力して来た。そのため常に中国文学の変遷発展に留意し、新しい傾向を追って模倣を重ねて来たので、我国独自の文学と断定することにはいささか躊躇せざるを得ない。その形式は中国に借りて内容に日本のものを盛り込むという二重の性格を持つのがその特色である。従って日本漢文学の変遷は中国文学のそれと平行している（時間的なずれは時代によって異なるが）といって過言ではない。例えば奈良時代には六朝から初唐の文学の影響が強く、平安時代になると白楽天の詩が詩人達に讃美され、中世の禅林には宋詩が流行し、江戸時代になると詩人の個性が発揮されてそれぞれの時代の詩が好まれた。また漢文学は終始知識階級に属するもので、その担い手は始めは学者文人を中心にした貴族であり、中世の僧侶から近世の儒者へと移って行った。以下奈良・平安・中世・近世と時代を追いながら概略を試みる。

〈奈良時代〉　記録によると応神天皇の御代に『論語』と『千字文』が伝来したとあるが、日本の漢文学の黎明は飛鳥時代になってからと思われる。だがその時代はまだ純文学の作品を生み出す程に成熟していなかった。『懐風藻』の序によると、近江朝ではしばしば宮廷に文学の士を招いて酒宴が開かれ、君臣唱和の詩が詠ぜられた。その詩篇は百篇以上に及んだが、壬申の乱の兵火で焼燼してしまったという。我国の最初の漢詩である大友皇子の作品から推して、当時は聖徳を讃美する類型的な作品が多かったのではなかろうか。壬申の乱の後に大津皇子や文武天皇などが登場するが、宮廷における侍宴応詔の詩が中心を成している。そして六朝詩の影響を受けて詠物詩が現れ、詩宴では各人に一定の韻字が与えられて作詩する方法も行われた。この時期の詩人達は『文選』や『玉台新詠集』『芸文類聚』などに詩句の手本を求めており、六朝詩の模倣が目立つ。養老から天平（七一七～四八）になると、詩苑の中心が宮廷から政治権力者に移行した。長屋王の佐保邸には官人や文人が集まり、新羅の使節を迎えて詩宴が催されたし、藤原武智麻呂の習宜の別邸には詩人達が招かれて才を競った。この時期には藤原宇合・万里・山田三方・石上乙麻呂等が活躍し、少し降って石上宅嗣・江三船等が登場する。彼等の詩には六朝詩だけでなく初唐の王勃や駱賓王の詩の影響が見られる。一般的に中国文学の摂取も皮相的なもので内容に立ち入ることはなく、儒教・老荘・神仏思想などは単なる語句の使用に留っている。この時代の漢詩集として個人のものに藤原宇合に集二巻、石上乙麻呂に『銜悲藻』二巻があったが散逸し、現存最古の総集である『懐風藻』百二十篇によって上代の詩の全貌を掴むことができる。一方散文としては『唐大和尚東征伝』を筆頭に、『万葉集』の序や『経国集』の対策などに華麗な駢儷文が執筆されていることに注目したい。

〈平安時代〉　奈良から京都に遷都した桓武天皇は儒教に基づいた政治体制の確立に意を注ぎ、遣唐使を派遣し学問を奨励された。その意図を継承された嵯峨天皇の時に唐風文化は黄金期を迎える。「文章は経国の大業にして不朽の盛事なり」（『凌雲集』序）の言葉は、文学が永遠不朽のもので国家経営に不可欠であることを強調しており、この文学理念の下に『凌雲集』『文華秀麗集』『経国集』の勅撰三集が相次いで編纂されたのである。当時宮廷や離宮などでは頻繁に詩宴が催され、多くの詩篇が生み出された。唐風文化への著しい傾斜は舶載された中国の詩集の増加に伴い、使用される語句が豊富になり、また新傾向の詩風や詩体が受容されて、『懐風藻』の詩よりも数段進歩して行った。詩の内容も遊覧・宴集・贈答から述懐・艶情・梵門・楽府などに拡大し、詩形も奈良時代の五言詩から七言詩へと移行するとともに、長篇や雑言体の詩も急激に増加し、我国で最初の塡詞も生まれている。弘仁期（八一〇～二四）の詩壇は卓越した詩才の嵯峨天皇を中心にして小野岑守・菅原清公・滋野貞主・良岑安世など文人官僚によって構成されており、宮廷文学的性格を持っていたことは前代と同じである。そしてこの宮廷詩壇と密接な関わりを持つものに僧侶の文学がある。嵯峨天皇の寵愛をうけた空海がその頂点に立つが、彼には詩文集『遍照発揮性霊集』や中国の詩論を集録した『文鏡秘府論』『文筆眼心抄』、戯曲的構成によって儒老仏三教の優劣を説いた寓意小説『三教指帰』『玉篇』に基づいて作った字書『篆隷万象名義』など多方面に亘る作品を残している。また入唐僧円仁の紀行『入唐求法巡礼行記』は紀行日記の先駆を成している。

漢文学は承和期（八三四～四八）に大きな転換期を迎える。この期に『白氏文集』が渡来すると、詩人達は競ってその摂取模倣に努め、「我朝の詞人才子白氏文集を以て規模となす。故に承和以来、詩を言ふ者皆体裁を失はず」（『本朝麗藻』巻下）と従来の詩風を一変する程大きな影響を与えたが、これは鎌倉時代まで続いた。白楽天は「文曲星神」（同上）と崇められ、その詩は「尽くこれ黄金なり」（『都氏文集』）と尊ばれた。また『令』の規定で創られた大学寮は、長い間経書の研究を主にした明経道が他を圧していたが、これに代わって歴史や文学を学ぶ紀伝（文章）道が優位を占めるようになり、文章院の創立によって菅原・大江の二家を頂点にする儒家が確立するとともに、これ以後は文壇が職業的学者詩人を中心にして展開して行った。承和から貞観（八五一～七）にかけてはまだ律令制の官僚機構が維持され、人材登用の道が開かれていたので、学者達は格式の制定や国史の編纂に従事しながら政治に参与し、一方で新しい詩文の世界の開拓に努力した。自己の憂憤を詩に托した熱血漢小野篁や、『都氏文集』を残し民間伝承を取上げて記録体散文の確立に成功した都良香！さらに台閣に列して多くの著述を行なった菅原是善・大江音人や橘広相、当代の詩匠と讃えられた『田氏家集』の島田忠臣などがおり、その後に菅原道真の登場を迎える。彼の作品は『菅家文草』『菅家後集』に収められているが、その外『類聚国史』の編纂や『新撰万葉集』の撰述も行っている。多情多感な道真は二度の僻地生活によって庶民生活を取り上げて新しい詩境を開拓し、また流謫という緊迫状況の下で卒直に感情を謳いあげた。この天性の詩人により始めて唐風の模倣を脱却して日本個有の漢詩が生まれたといって過言ではない。彼と同時代に活躍した紀長谷雄は種々の雑

言詩に新しい境地を拓いて『紀家集』（巻十四のみ現存）を残し、三善清行は『藤原保則伝』や「意見十二箇条」などに己の経倫を吐露して儒教精神を鼓吹した。しかし彼等の死後紀伝道が衰退して行くにつれて、学者達は政治の世界から追われ狭い詩文の世界に没頭せざるを得なくなった。そして和歌の隆盛に伴って漢詩も次第に和風化の傾向を強め、内容よりも表現を重視する美文意識が文壇を支配した。

天暦期（九四七～五七）には好文の村上天皇を上に戴いて最初の詩合が開催され、秀れた詩人が輩出して漢詩文は隆盛を極めた。その華麗な秀句が朗詠によって賞翫され多くの逸話を残した大江朝綱や菅原文時、『日観集』（散逸）『千載佳句』を編纂した碩学大江維時が知られる。一方起家出身のために生涯卑位に沈淪した源順は『和名類聚抄』など啓蒙的著述によって大きな貢献をしたが、これは『三宝絵』『世俗諺文』『口遊』の著者として名高い弟子の源為憲に受け継がれて行く。また「菟裘賦」の作者で悲劇的生涯を終えた兼明親王は世人の同情を集め、「池亭記」『日本往生極楽記』を書いた慶滋保胤はその真摯な生き方が後世の模範とされた。次の一条朝には頻繁に詩会が開催され、詩人達が詩文を競ったことが『本朝麗藻』に示されている。『江吏部集』の大江匡衡や『扶桑集』の撰者紀斉名、これと拮抗した大江以言や皇室詩人具平親王などの詩才は説話を通して知ることができるが、その作品も応制唱和の儀礼的なものが多く、字句の形式的な整斉に終始するだけで格調を失い平板に堕する傾向は否めない。詩人達の不遇な境遇と不安定な精神状態を反映して、作品には暗い色調が漂っており、時代が降るに従ってこうした傾向が強くなって行く。しかも藤原公任の『和漢朗詠集』の撰述は、漢詩が広い階層に享受された反面で、一聯の詩句によって作品全体を評価する弊害を招いたことは否めない。一条朝以後漢詩文は衰退の道を辿って行ったが、漢詩文の衰勢は『本朝続文粋』や『中右記部類紙背漢詩集』『本朝無題詩』などによって、その一端を窺うことができる。平安後期で逸することのできぬ学者は藤原明衡と大江匡房である。明衡は嵯峨天皇から後一条天皇までの代表的詩文を類集した『本朝文粋』や書簡文を集めた『明衡往来』、演劇史の資料として名高い往来物風の『新猿楽記』の編著者であり、匡房は『江家次第』『続本朝往生伝』『本朝神仙伝』『江都督納言願文集』『江談抄』などの著者として広汎な文学活動を行っている。この時代の漢文学は、庶民風俗を平易を詞句で表現した作品が登場したこと、混濁不安な世相を反映して多くの願文・表白や往生伝が書かれたこと、『作文大体』『童蒙頌韻』など初学者のための啓蒙書が続出したことなど、新しい現象が指摘される。

〈中世〉　鎌倉時代になると秀れた詩人も出現せず、文学よりも経学が重視されたために漢詩文には見るべきものはない。ただ貴族の間で詩会が催されたことは『猪隈関白記紙背詩懐紙』や公家の日記によって知ることができる。また詩歌合や連句が行われて『元久詩歌合』『内裏詩歌合』などが残されており、一方で『和漢兼作集』『教家摘句』などの秀句選が編纂された。当時の学者の著述として見るべきものは菅原為長の『文鳳抄』や藤原孝範の『明文抄』などの作詩指南書や故事金言集に過ぎない。むしろ澄憲や海恵などの唱導文学、例えば『言泉集』『転法輪抄』『澄憲作文集』『海草集』などが注目されようか。しかしこの時代の漢詩

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

文は京都を中心にした五山文学によって代表される。鎌倉時代に留学僧や帰化僧によって中国の禅宗とともに禅林生活における詩文製作の風習が我国に齎された。鎌倉末期に一山一寧・西磵子曇等が来朝帰化して弟子の養成に励み、竜山徳見・雪村友梅・天岸慧広・別源円旨・中巌円月等入元僧が相継いで、元代の新しい禅風と文学的雰囲気に育てられて帰朝し、我国に新しい詩風を生み出した。雪村の『岷峨集』天岸の『東帰集』別源の『南游集』中巌の『東海一漚集』などがその代表的なものである。そして清拙正澄・明極楚俊・竺仙梵僊等元朝の名僧の来朝によって文雅の交遊が続けられ、禅林文学は急速な発達を遂げた。一方旧い伝統を受けながらそれを発展完成させたのが虎関師錬である。彼は該博な知識を有して我国の僧史である『元亨釈書』を著し、その詩文『済北集』の外に童蒙のために四六文を集めた『禅儀外文集』や作詩の便覧として韻書『聚分韻略』を作っている。幾多の曲折を経て足利幕府により京と鎌倉に五山十刹の制度が確立すると、才能豊かな僧侶が勉励によって次第に中央に集中するようになり、五山の禅僧の中には幕府に重要視されて政治や外交に関与する者も現れ、また貴族階級との接触によって都市化貴族化の道を歩むようになる。そして室町初期に義堂周信と絶海中津の登場によって五山文学は最高峰に到達する。広い学識と深い観照に裏打ちされて巧緻な作風を示した義堂には『空華集』の外に宋元の禅僧の偈頌を集めた『貞和類聚祖苑聯芳集』があり、洗練された詩風と巧妙な四六文で知られた鬼才絶海には『蕉堅藁』が残されているが、彼等の活躍によって始めて中国の詩に比肩し得る漢詩文が作られたといっても過言ではなく、後の五山文学の展開を方向づけた。彼等の蹤を受けた禅僧としては『峨眉鴉臭集』の太白真玄、『東海瑤華集』の惟肖得巌、『続翠詩藁』の江西竜派、『臥雲藁』の瑞渓周鳳、『村庵藁』の希世霊彦、『京華集』の横川景三、『黙雲藁』の天隠竜沢、『幻雲詩稿』の月舟寿桂、『翰林葫蘆集』の景徐周麟、儒学に精通して多くの注疏を行った桃源瑞仙、放浪漫遊し『狂雲集』『続狂雲詩集』を残した風狂僧一休宗純、程朱学者として功績の大きい『島陰漁唱』の桂菴玄樹などが注目されるが、次第に作風の変化が乏しくなり感動が浅くなったことは否めない。そして四六疏が盛んに作られ、聯句会や詩会が頻繁に開催されたことは注目される。なお五山の僧の詩文集は個人の別集が多く総集は極めて少ないが、『百人一首』『北斗集』『花上集』などにその一端が載せられている。五山の僧達には宋学に関心を持つ者が多く、漢籍の研究注釈が行われ、一般には『三体詩』や『古文真宝』が教養書として受読講義され、その多くは抄物として残されている。また彼等の文化事業として五山版が盛況を極めたことも忘れられない。

〈江戸時代〉　江戸時代は漢文学の全盛期であるが、この時代は儒者詩人という一種の職業人が担い手である。近世文運の開拓者と称される藤原惺窩は徳川家康の庇護を蒙り朱子学を提唱したが、その文学観は文学は道徳を顕彰すべきものだという載道派に属するもので、『惺窩先生文集』や『文章達徳綱領』によってもその作品は芸術的雅趣に乏しいといわねばならぬ。その弟子で幕府の顧問として名高い林羅山も『羅山文集』『羅山詩集』を残しているが、その詩は散文的で見るべきものはなく、むしろ博識な啓蒙家の色彩が濃い。惺窩の弟子で文章に秀れた『杏陰集』の堀杏

庵、古活字版の刊行で名高い『活所遺稿』の那波活所、師の衣鉢を継いだ京学の祖松永尺五（貞徳の子）などが知られるが詩人よりも学者である。むしろ日本の李杜と称された『覆醬集』の石川丈山と情趣に富む佳品を残した『艸山集』の僧元政が双璧である。尺五の門人には木下順庵・安東省庵・宇都宮遯庵・貝原益軒等が名高い。また羅山の後には鵞峰・読耕・梅洞・鳳岡等が現れ、活所の次子魯堂や弟子の伊藤坦庵・村上冬嶺も知られる。陽明学の首唱者中江藤樹や弟子の熊沢蕃山、古学派の山鹿素行、敬義学の山崎闇斎などの詩には全く見るべきものはない。注目すべきは一世の名儒でその門下に逸材が輩出した順庵で、彼は専ら唐詩を尊び韓柳の文章を愛して『錦里文集』を残した。その門下からは新井白石・室鳩巣・祇園南海・雨森芳洲等木門十哲と称される学者詩人が登場した。経世家として名高い白石は詩人としても一流であり、室鳩巣は経学文章をもって知られ、一夜にして百首を詠じた南海は詩語の富贍と描写の的確に世評が高く、芳洲は華語に明るかったので名高い。朱子学の勧善懲悪的見解から脱して文学の主眼を人情の表出に置いた古義学派の伊藤仁斎は、新しい学問の確立と卓越した教育によって秀れた門弟を養成したが、『紹述先生詩文集』の嫡子東涯を経て『三角集』の奥田三角や『双桂集』の原双桂などが現れた。しかし文芸が活気を呈した元禄期（一六八八～一七〇四）に古文辞学を提唱し風雅の道を顕彰したのが荻生徂徠で、その門下に詩人が輩出して一世を風靡した。彼は明の李于鱗などの古文辞学に心酔して、擬古的な文を作ることから、古語の解明によって古典を研究することを第一義と考え、華音の学習と漢文訓読の廃止を説いた。そして文は秦漢、詩は盛唐を手本にし、表現修辞を重んじて擬古に心掛けた。古文辞学派の出現によって、従来愛読されていた『三体詩』や『古文真宝』が卑陋なものとして否定され、『唐詩選』が大いに流行したことは大きな功績といえよう。徂徠の門下には経世儒者として知られた太宰春台、風流温雅で人望の高い詩人服部南郭、失明の努力家で詩人の高野蘭亭、豪放無頼の鬼才平野金華、伊勢神戸の好学藩主本多猗蘭、経世の才に富んだ山県周南、華音に巧みな肥前の黄檗僧大潮（魯寮）、品川東禅寺の詩僧万庵などを数えることができる。その他には詩豪をもって当時を圧した梁田蛻巌、才気縦横にして五言絶句を得意とした秋山玉山、晩唐の宗匠と謳われた純粋詩人鳥山芝軒、その声望を識者に認められた桂山彩巌などが活躍した。

江戸後期には文人儒者が輩出して漢詩の全盛時代を極める。この時期には太平浮華の世相を反映して専門詩人が登場し、遂に詩社の勃興を促すことになった。そして詩集の出版も多く、地方に埋れた優秀な詩人が現れた。詩の結社としては服部蘇門の長嘯社、竜草庵の幽蘭社、江村北海の賜杖社、片山北海の混沌社、高暘谷の芙蓉社など最初は関西に一大勢力が形成された。中でも江村北海は『日本詩史』の著者として名高いが、弟の清田儋叟や友人の皆川淇園とともに詩文に勝れ、江戸の入江北海、大阪の片山北海と並べて三北海と呼ばれた。また片山北海は門弟に柴野栗山・尾藤二洲・古賀精里の寛政の三博士や頼春水などがいて、混沌社の名は天下に伝わった。宝暦・天明の間（一七五～八〇）に折衷考証学派が台頭するが、その中心をなした山本北山は古文辞学を攻撃して、袁宏道の性霊説を信奉し、詩は格調ではなく天真の性情（性霊）を詠むべきものであることを主唱し、平明清新な宋詩

を尊んだ。しかしその詩には見るべきものがなかったが、宋詩提唱が功を奏して門下に秀れた詩人が出た。林家の朱子学を学んだ市河寛斎は博識宏才で『日本詩紀』編者として知られ、江戸に江湖社を創って大窪詩仏や菊池五山の双璧を門下から出した。詩仏の『詩聖堂詩話』と五山の『五山堂詩話』は当時の詩壇の状況を知る好資料である。北山と同門の亀田鵬斎は才学文章とともに書に秀れ多くの著述を残し、その子綾瀬も家声を落とすことなかった。しかし当代随一の詩人は『黄葉夕陽村舎詩』の菅茶山で、彼は郷里の備後神辺に廉塾を開いて弟子を養成したが、温和な人格と風格高逸な作品は世人の尊敬を集めた。その門から出た頼山陽は天禀の詩人で特に古詩と詠史に秀れたが、『日本外史』『日本政記』など史論に名高く、後世に大きな影響を及ぼした。山陽の友人の田能村竹田や篠崎小竹も詩才に富み、その弟子の藤井竹外は七言絶句を得意とした。古賀精里の門からは野田笛畝・古賀穀堂・伺庵・野村篁園・斎藤拙堂・草場佩川等がおり、篁園に師事した友野霞舟は江戸時代の名詩を集めた『熙朝詩薈』で知られる。また著名な詩人としては熊本の藪孤山、仙台の斎藤竹堂、大阪の懐徳堂院主の中井竹山等がいる。古文辞学派の松崎観海の門から狂詩狂歌で名高い大田南畝・熊阪台州、中西淡淵門に南宮大楸・細井平洲、山県周南門の亀井南冥・昭陽父子がおり、郷里に私塾咸宜園を開き海西の詩聖と称された広瀬淡窓と弟の旭荘や村上仏山は南冥父子に学んでいる。折衷考証学派では山本北山の門から出て後に離れた博学多作の太田錦城や玉池吟社を開き日本の李白と称された梁川星巌、さらにその門から大沼枕山・小野湖山・森春濤が出、亀田鵬斎門に芳野金陵・館柳湾が現れ、この系統が幕末から明治時代にかけて詩壇に君臨した。一方古注学派には宇野明霞の門から村瀬栲亭・僧大典・竜草廬等がいる。詩文に長じた相国寺の僧大典の友人に宋詩を提唱した釈六如がおり、また栲亭門の粋人中島棕隠は竹枝詞をよくし、梅辻春樵も詩人として盛名があった。文字音韻に明るかった山梨稲川は古詩に秀れ、市河寛斎門で放浪生活を送った柏木如亭は純粋孤高の詩人といえよう。これらの専門詩人とは全く異色の存在が良寛で、その詩は悟道の境地を示している。また女流詩人としては原采蘋・江馬細香・梁川紅蘭などが挙げられる。これらの外にも各地に頗る詩人が多く、その人々の作品を集めた撰集も相次いで出版され、また朝鮮の使節との唱和詩も刊行されており、一方で狂詩も盛んであった。江戸後期は百花繚乱ともいうべく漢詩の全盛時代であったが、それを統一する詩風は見られず、個性的作品が喜ばれた。そこに文人意識の確立を認めることができるであろう。

〈参考文献〉　江村北海『日本詩史』五巻（安永8刊、岩波文庫、日本儒林叢書3、日本詩話叢書1、近世儒家史料中）、芳賀矢一『日本漢文学史』（冨山房、昭3）、岡田正之『日本漢文学史』（共立社、昭4、増訂版、吉川弘文館、昭29）、牧野謙次郎『日本漢学史』（世界堂書店、昭13）、菅谷軍次郎『日本漢詩史』（大東出版社、昭16）、戸田浩暁『日本漢文学通史』（武蔵野書院、昭32）、維方惟精『日本漢文学史講義』（評論社、昭36）、市川本太郎『日本漢文学史概説』（大安、昭44）、猪口篤志『日本漢詩』上下（新釈漢文大系45 46、明治書院、昭47）。

（大曾根章介）

懐風藻（くわいふうさう）

〈概括〉現存最古の漢詩総集。

〈成立および概観〉本書の成立は、その序文に「于レ時天平勝宝三(七五一)年歳在二辛卯一冬十一月也」とあり、孝謙女帝の御代に成った。名義については、やはり序文に「余撰二此文一意者、為レ将レ不レ忘二先哲遺風一、故以二懐風一名之云爾」とあることから、先賢の残した詩文の趣を忘れぬように思い慕うの意であろう。諸本とも序文の後に目録があり、その次に各詩人別に作品を排列するという体裁をとっている。作者の排列順序は、ほぼ時代順であると目録の双行注にある。作者は天皇一、皇太子一、皇子二、諸王七、三位以上十二、五位以上三十、七位以上六、僧侶四、隠士一の計六十四人である。時代的には、壬申の乱(六七二)でなくなった大友皇子より、ほぼ一世紀の間に生きた人間たちの作品を集める。ただ収載詩数には脱落もあって問題があり、近時の研究では麻田陽春の作を、二首とみる説(林古渓)と、一首とみる説(杉本行夫・大野保・小島憲之)があり、さらに類従本系の諸本にのみ見える釈道融の擬四愁詩と「山中」、および末尾の亡名氏「五言、歎老」について、「山中」だけは認める説(杉本・大野)と、三首とも後人の付会とみる説(林・小島)が存しているのであるが、何れにしろ百十六首(小島)か、百十七首にしかならず、序文でいうところ(百二十首)と実数とが一致しないのである。その他、詩序が六篇(うち一篇は正確には書簡体の啓)と、簡潔な伝記九篇が収められている。

〈内容〉本書は私撰集であるが、その撰者をめぐっては近世以来議論が絶えず、現在までその決着はついていない。そもそもの原因は、序にあるべき署名が無いことから発するわけであるが、小島憲之の総括するところを中心に述べれば、以下のごとくである。

(一)淡海三船説(林春斎・尾崎雅嘉・上田秋成・榊原芳野・柿村重松・横田健一など)

(二)亡名氏説(平出鏗二郎・久保天随・今田哲夫など)

(三)撰者未詳説(市河寛斎・芳賀矢一など)

(四)その他の諸説――葛井広成説(武田祐吉・大橋清秀など)、石上宅嗣説(川原寿一)、藤原刷雄説(山岸徳平)、集中に名を残さぬ佚名氏説(林古渓)、仏家説(福井康順)、御方大野説(H. ISTVAN)、白壁王説(神田秀夫)

これらの説に対する批判は山岸徳平(「懐風藻概論」『上代日本文学講座』第四巻)、小島憲之(『上代日本文学と中国文学』下・一二三八頁以下)に譲るが、現状では本書成立時に低位薄給の官吏であり、長屋王あるいはその佐保楼の詩宴に何らかのかかわりを持ち、藤原氏に近いが、一方武智麻呂(南家)にはある反感を抱き、近江朝時代に対して強い哀悼の情を抱かねばならぬ必然性を持つ某人という以外にない。

さて、それでは詩形の問題に移る。詩数を今、小島説によって算すれば、五言と七言、それぞれの長短などは次の表のごとくである。

これによれば、五言詩が圧倒的に多いことが知られようが、その割合は『文選』中の楽府を含めた全詩作のうちの五言詩の占める割合と一致するのである。また、七言詩は唐代より盛行するが、本書においてもその後期(養老以後)に五首が書かれている。句数は八

	五言	七言	計
四句	18首	4首	22首
八句	72	1	73
十句	6		6
十二句	10	1	11
十六句	2		2
十八句	1	1	2
計	109首	7首	116首

句が極端に多く、十句以上のものは極めて少ないという事実も、六朝初唐の風にほぼ倣うということが可能である。

こうしたことは、平仄式についてもそのまま当てはまる。すなわち前期（養老以前）においては今体詩の平仄式を全く意識しないが、後期になると明らかに平仄が意識された句作りがなされ、律詩として完全な作品も作られてくる。そして、末期になれば藤原宇合や石上乙麿といった主要詩人たちは、その作のほとんどが初唐詩の水準に達しているといってよいものを書いているのである。平仄は中国本土にあっては『切韻』成立（六〇一）直前に意識せられて、庾信や徐陵が詩作に応用して以来次第に整備され、初唐末期に今体詩としての平仄式が完成されたわけであるから、日本の詩人もその風潮を追っていたのである。その証拠に『懐風藻』序の中の誤句法といわれる、

百済入朝、啓竜編於馬廐、
高麗上表、図鳥冊於鳥文、（○は平、●は仄）

の部分も、他の同句法の箇所に誤りが全くないことからみて、平仄ゆえにこそ「鳥冊」と「鳥文」の位置を入れ換えねばならなかったと考えられるのである。ただ全体として見た場合、中国詩よりも声律に甘さが残るのは否定しようはなく、技量と訓読、当時の社会事情等の問題にかかわると推定される。

とかく瑕瑾のある平仄に対して、対句技巧のほうは視覚的にも、また訓読によっても大きな効果が得られるためであろう、当時の詩人も多大な注意を払い、それに見合う成果を収めている。さきに示したごとく、書序や詩序は華麗な隔句対を駆使した駢儷体で書かれていたし、詩においても全作品中対句を含まぬものはわずか二首であり、全篇が対句から成るいわゆる全対格の作も少なからず存し、盛唐の詩に見るような芸術的なものはともかく、色対・数対・双擬対・双声対・畳韻対など視覚的音韻的様々なものが用いられて、六朝から初唐の詩人と遜色がない程度の対句技巧と種類を使い分けていたといい得るのである。

次に、押韻上の問題点は、仄韻詩が五首含まれること、使用韻字に片寄りのあることが指摘される。仄韻詩は、その大部分が前期、それも近江朝期に集中しており、いまだ平声が重視される以前の、六世紀中期以前の漢土の風潮に従ったのである。後者については、真韻を用いた詩が実に三十二首もあり、尤韻十三首がそれに次ぐ。これには他の韻を駆使するだけの技量を持たなかったこと、およびこれらの韻目には収められた文字が多く、押韻による拘束が比較的緩やかであることにもよろうが、真韻（十八諄韻、十九臻韻も同用）の中には、

烟、新、臣、仁、人、神、親、賓、浜、鱗、陳、塵、津、倫、春、旬、辰、民、

等の文字が含まれていることからも分かるように、集中に最も多い春の「侍宴従駕」や「讌集」「遊覧」の詩作に、非常に適した韻目であったからである。事実、平安朝におけるこの種の作を見ても、

真韻を用いたものが多いのである。

外形律についてはこのくらいにして、詩想の説明に移る。対境の上から全詩を分類すれば次のごとくである。

侍宴従駕	三四首	讌集	二二首
遊覧	一七首	述懐	九首
間適	八首	七夕	六首
贈与	六首	詠物	五首
憑弔	三首	憶人	二首
算賀	二首	釈奠	一首
臨終	一首		

（岡田正之説）

天子貴紳を囲む詩宴において、詔に応じ、相唱和するのは六朝初唐の風であり、他の対境も六朝期に多く見られるものであった。今、節宴や賀宴も含めれば、本書の詩作の半数以上は宴席で作られたことになる。藤原不比等や武智麻呂等によっても詩宴が催されていたらしいが、中でも特に詩風の変遷という観点より重要視されるのは、長屋王の佐保楼での詩宴であり、当時の主要詩人はもちろんのこと、新羅からの使者を迎えて頻繁に開かれていた。本書には二十首余りの詩と詩序が録されている。そこでは詩序が初めて作られ、近体詩の平仄が考慮され、初唐の王勃や駱賓王の詩句からの引用が際立ってふえた。すなわちこの時期以後、集の詩群は本格的に初唐詩への傾斜を早めることになるのであるが、長屋王自身の問題を含めて、この詩宴が本書において、また文学史において、いかなる意義を持つのか、解明されねばならぬ問題は極めて多い。

一方、本書に盛られた思想の方面より述べれば、儒教を根本精神とする律令国家理念に支えられた帝徳賛美が中心を成すのは当然であるが、その儒教精神は『論語』雍也篇の「知者楽レ水、仁者楽レ山」に基づく詩句が十三首も見えることに典型的なように、多くは類型化され抽象化された実感の乏しいものであり、わずかに藤原万里が剛直の忠臣、大神高市麻呂を追慕した「過二神納言墟一」二首あたりに、その具体的表れを見るのみである。

それに対して、老荘思想は神仙思想や清談の風と結びついて、文人趣味の一種の憧れとして大いに流行した。本書には隠士なる者まで収録されている。越智広江の「述懐」に「荘老我所レ好」などとあり、紀男人「七夕」の「犢鼻標レ竿日」や、藤原宇合「遊二吉野川一」の「清風入二阮嘯一、流水韵二嵇琴一」などは竹林七賢の故事をふまえている。中でも仙境と意識された吉野を詠んだ詩には、柘枝伝説とともに神仙思想を象徴する「方丈」や「桃源」「姑射」等の語句が多数詠み込まれている。ただこれも「仁山智水」の語とともに用いられているところから、当時の詩人にとっては儒教思想と同じく、吉野という特殊な地を修辞する単なる意匠に過ぎなかったといえるのである。

また、本書には四人の僧侶が採られ、国家宗教として仏教が採用されていたわけであるから、仏教思想の影響が僧侶の作以外にも表れてしかるべきであるが、これも道融と道慈の作を除いては全くといっていいほど、表れていない。「方丈」なる語が神仙の住む島の意にのみ用いられ、仏教語としての維摩居士の住居の意に用いられることの無いのもその一例である。現に後者の意で、旅人が『万葉集』巻五に「維摩大士在二乎方丈一」と使っているのであった。

同様に『万葉集』との比較からいえば、恋愛や女性を詠んだものが非常に少ないということがあげられよう。荆助人「詠美人」や石

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com